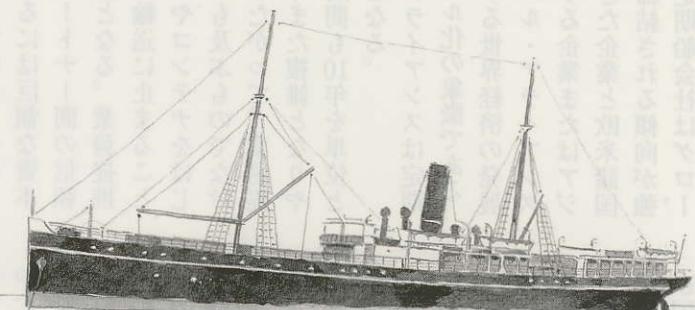


電気照明を導入した日本で最初の船



長門丸（筆者画）

文・山田廸生（船舶史家）



旅順港閉塞に向かう長門丸の乗組員（東京水交社『第三回旅順閉塞隊秘話』（昭和9年刊）より）

長門丸

《主要目》 貨客船、鋼製、共同運輸所属、総トン数1,854トン、長さ79.9メートル、幅10.5メートル、主機2連成汽機1基、出力1,440馬力、最高速力13.5ノット。明治17年（1884）英ネビア・シャンクス&ベル社（グラスゴー）で建造。翌年、日本郵船設立にともない同社に移籍。明治43年（1910）解体

突入を断念した旅順港閉塞船

右頁の写真は、日露戦争のとき、3回目の旅順港閉塞船隊の1隻に選ばれた「長門丸」の乗組員である。出撃前にボート甲板で撮られたもので、22人が写っている。

決死隊ということもあるが、いまの日本の若者とは顔つきが明らかにちがう。とくに最前列の6人の形相がすさまじい。それに持つてある武器も異様である。

向かって右の若者から順に、出刃包丁、日本刀、斧、ピストル、鉄、短刀（？）を手にしている。近代化されたロシア軍を相手に、

まるで猪狩りにでも出かけるような装備ではないか。蛮勇とでもいおうか。日露戦争時の高揚した士気が伝わってくる写真だ。

旅順港閉塞は、ロシア太平洋艦隊を旅順港内に封鎖するため、港口の狭い水路に商船を自沈させようとした作戦である。明治37年（1904）の2月から5月にかけて3回おこなわれ、21隻の商船が参加した。広瀬武夫が指揮し戦死したことで有名な「福井丸」が出撃したのは第2回であるが、作戦規模が大きく、ロシア軍の砲撃が激しかったのは第3回で、商船12隻が出撃した。

第3回の当日は、あいにく悪天候だった。総指揮官の林三子雄海軍中佐は、突入前日の夜遅くに作戦延期を決め、搭乗した1番船「新

發田丸」から後続船に、発光信号でこれを伝えた。ところが、後続各船は、荒天のうえ、単縦陣をくずして分散していたため、発光信号の通読が困難になっていた。

結局、2番船「小倉丸」と8番船「長門丸」だけが命令を了解して作戦を断念。8隻がそのまま港口に突入し自沈した（6番船「釜山丸」はボイラー故障で突入を断念）。

こうして「長門丸」は戦没をまぬがれた。異様な武器を手にした若者たちは、蛮勇を發揮することなく終わつたのである。

「電灯は昼の如し」

わが国で初めて電気照明を採用した船は「長門丸」とされている（山高五郎『日の丸船隊史話』）。船客にくばつたウチワに「電灯は昼の如し」とあるのが根拠のようだ。

「長門丸」は、共同運輸会社が英國に発注し新造した10数隻のうちの1隻である。そのほとんどは、英國で電気照明が普及しつつあった明治17年（1884）に完成し、三菱会社のライバルとして国内航路で活躍した。おそらく、「長門丸」だけでなく、10数隻のすべてに電灯がついていたのではないか。

そのウチワには、10項目のセールスポイントが箇条書きになつてある。「電灯は昼の如し」のほかに、「速き事矢の如し」「美なる事花の如し」「飲食は甘露の如し」「親切なる事愛婦

の如し」などなどが、「純粹なる事水晶の如し」とあるのは、いったい何のことだろう。共同運輸と敵対する三菱の総帥岩崎弥太郎の政商体質を揶揄したものだろうか。

19世紀後半まで、汽船の船内はたいへん暗かった。とくに夜は真つ暗だつた。北大西洋航路の最新の大型客船でも、照明はランプかロウソクだつた。しかも、夜がふけると消灯するから、船客は闇のなかをさまよつたのである。

こんにちの白熱電灯をエジソンが発明したのは、明治12年（1879）である。翌年、エジソンの指導で、米オレゴン鉄道汽船会社の汽船にこれがとりつけられた。北大西洋航路では、明治14年（1881）に就航した英キユナード・ラインの「セルヴィア」（7392総トン）に白熱電灯が導入された。

電気照明が船旅に及ぼした影響は、はかりしれないものがある。夜の洋上生活の幅が広がつた。船旅のイメージは一変した。

この30年後に出現した「タイタニック」にみられる華麗な夜の世界は、電気照明が可能にしたものである。そして、よく知られているように、「タイタニック」の明かりは沈没の瞬間まで消えなかつた。船客が闇のなかでパニックにならぬよう、機関士たちは船底に近い職場で懸命に発電機を動かし、船と運命をともにしたのである。